

表象としてのりんご

金山 愛子

はじめに

敬和学園大学にはニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけとなった「ニュートンのりんごの木」の子孫にあたる木が植えられている。このりんごの木は秋田県果樹試験場から苗木を分けていただいたもので、聖籠町産のりんごの木と一緒に植えてある。敬和学園大学に学ぶ学生への「ニュートンのように世界をリードする人材が育ってほしい」という願いが込められている^①。また敬和学園大学の所在地である新発田市の新潟県立西新発田高校は創立100周年を迎えた2002年に「二つの林檎」と題するりんごを手にした少女の彫像を設置した。この彫像の制作者である細野氏は「少女が手にしている林檎はアダムとイブの物語に出て来る林檎です。これは（中略）生命の話と理解してください。そしてもう一つの林檎はニュートンが万有引力を発見したときの林檎です。これは学問のテーマと致しましょう。一つは生命の問題であり、一つは学問の事です。この大切な二つの事を学ぶところが学校であると考えています」と解説している^②。このように「りんご」という一つの表象をキーワードに、ヘブライ神話—厳密にはその解釈—と科学史上の重大な発見—厳密にはそれにまつわる逸話—が並列的に語られることが多い。ここに宗教と科学という分野におけるイメージの共有が見られ、興味深い。

本稿では、2002年度に演習で学生たちと学んだことをもとに、りんごに付与されてきたイメージを少し掘り下げて考察してみたい。りんごについては、すでにりんご文学アンソロジーとも言える北嶋廣敏著『林檎学大全』全3巻^③があり、長野県三水村の三水アップルミュージアムでは、りんごの歴史を示すパネルからりんごを印刷したスーパーの袋に至るまで、数は多くないにしてもりんごにまつわる品々が展示されており、また、ある程度りんごの歴史をたどれるようなホームページも開設している。

本稿は北嶋の収集した広範なりんご文学のひとつひとつにあたるものではないが、りんごのイメージの神髄を形成する創世記第3章のエデンの園の善悪の知識の木と、楽園ヘスペリデスの園のりんごに代表されるギリシア神話に登場するりんごについて主に考察したい。それは、りんごに関しては原点

とも言えるふたつの神話には興味深い共通点と相違点があるからである。

アダムとイブのりんご

エデンの園に植えられていた善悪の知識の木がりんごの木であったという記載は聖書にはない。その木が何の木であったかという問題は、古来より多くの人々を刺激し続け、ラビ達もそれについて論争していたと言われる。いつ頃からりんごに定まったのかは明らかではないが、*felix culpa*（幸福な墮罪）と言われる人の墮罪の原因となった果実は、ニュートン（1642-1727）の万有引力の法則発見と相俟って、りんご以外にはもはや考えられないのではないだろうか。すなわち、墮罪という落下のイメージが、ニュートンがりんごの落下を見て、引力の法則を考えるに至るという逸話と見事に符合するのである。このような人間の、そして事物の落下は、すべてを支配する絶対者の御手の中にあるというイメージをリルケは「秋」という詩で表わしている。

木の葉が落ちる 落ちる 遠くからのように
 大空の遠い園生が枯れたように
 木の葉は否定の身ぶりで落ちる

そして夜々には 重たい地球が
 あらゆる星の群れから 寂寥のなかへ落ちる

われわれはみんな落ちる この手も落ちる
 ほかをごらん 落下はすべてにあるのだ
 けれども ただひとり この落下を
 限りなくやさしく その両手に支えている者がある⁽⁴⁾

木の葉の落下は、重力の影響で起ることは誰もが知るところであるが、ここで注目すべき点は地球の落下である。「重たい地球があらゆる星の群から寂寥のなかへ落ちる」とは、他でもない人間の墮罪を意味する。さらに人間だけではなく地球までもがその責めを負い、地球のみが沈黙の惑星となり、天球の音楽を奏でることができないという中世からの世界観があった。しかしながら、キリスト教の教義では、その落下を支えるのが、あの禁止を命じ、人類救済のために独り子を世に賜った神なのである。これが*felix culpa*の概念である。

それでは、知識の木の実としてりんごが選ばれるに至った経緯を見てみよう。知識の木の実がりんごに定まったのはミルトンの『楽園の喪失』(1667、74)に依るという説がある⁶⁾。

この美しいりんごの実をなんとしても食べたい、
 そういう強い欲望を満たすために、なにをも
 ためらうまいと決意いたしました。 (『楽園の喪失』第9巻584-586⁶⁾)

確かにミルトンは創世記の物語を再現するにあたり、はっきりと木の実をりんごとしているものの、ミルトン以前にすでに知識の木の実をりんごで表わす人々は数多くあり、ミルトンまでにはほとんど知識の木はりんごであるという解釈が一般的であったようである。しかしこれは、先に述べたようにニュートンが万有引力の法則の基本的な考え方をまとめた年とほぼ一致しており、これまでにないインパクトを持って、りんごが落下 (fall) というイメージで人々に訴えたことは想像に難くない⁷⁾。球形の赤い実は見た目に美しく食欲をそそくという点で、誘惑者としての資質を十分に備えており、また同時にリルケの詩で語られているもう一つの球形、すなわち地球へとイメージはつながる。

創世記に話は戻るが、第2章、第3章にはエデンの園における神から人への唯一の禁止と蛇の誘惑による人の墮罪とが記されている。

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

(2:15-18)

園の中央に生えている木の果実はりんごであるとする説のひとつの根拠は、ラテン語でりんごを表わすmalumという言葉は、短母音、長母音の違いこそあれ、「悪」を意味する言葉でもあるということである。創世記第2、3章で「果実」を表わす言葉はすべてfructusであるが、第3章第5節のscientes bonum et malum (あなた方は善悪を知るであろう) という言葉のmalumがりんごを意味するmalumを連想させることは容易である。たとえばナンシー・エコーム・バーカートは『白雪姫と七人の小人たち』の挿絵の中で、二重の意味を込めてりんごに大きくmalumと書いている⁸⁾。

しかし、りんごの議論は聖書がラテン語に訳される前からラビ達の間で論争的になっている。「リンゴ説が多く、その他ブシュカン(Citrus medica)説、アンズ説、カリン説、イチジク説など幾世紀の間に一応出揃っていた⁽⁹⁾」。りんご説が多い中でイチジク説も強力であったということである。その根拠としてハインツ＝モーアは、古代におけるいちじくの持つ性的な意味合い、罪(peccare)はヘブライ語のいちじく(peg)に由来するという通俗語源説、そして、アダムとイブが腰にいちじくの葉を綴り合わせたという記事を挙げている⁽¹⁰⁾。確かに古代ユダヤの彫刻物の中には、いちじくを知識の木とするレリーフがある。しかし、いちじく説には問題がある。アダムとイブが知識の木の実を食べた後、「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」(3:7)とあるので、おそらく意識的に知識の木の名前を挙げないでおいた聖書記者が、ここに来て、その木の名前を不用意にあげるといふことは考えがたい。したがっていちじくの木は、知識の木のそばにあったものであっても、同一の木と見なすことは困難であるので、この説は退けたい。なお、オレンジ(Citrus sinensis)を指すという説は、オレンジはごく近年に渡来した果樹で聖書時代になかったので退けながらも、大槻は「Tappuahの語は聖書に何回も現れ、独・英・和いずれもリンゴと訳した⁽¹¹⁾」として、興味深いブシュカン説を紹介している。

ラビ達の間では、ミカン類のブシュカン(Citrus medica)が一名「アダムのリンゴ」と呼ばれ、古くから聖地にあったので問題となった。表面に凹凸の多い不格好な形をしている。エバがまず表面の柔らかい所を食べて、残りをアダムに与へ、中の芯の部分はアダムも噛み切れず無理に呑み込もうとしたので、今でも男子には喉仏が残ったという話もある⁽¹²⁾。

英語でも「喉仏」はAdam's appleであるから、ユダヤではブシュカンが「アダムのりんご」すなわち「喉仏」と呼ばれていたとしても、りんごの場合と同様、知識の木がブシュカンであったという説の根拠にはならない。しかし、オレンジやりんごほど「いかにもおいしそうで、目をひきつけ」(3:6)のわけではないにしろ、ブシュカンもその色彩において後に考察する「黄金のりんご」をイメージさせるものとしては興味深い説ではある。

さらに、りんごは聖書の中では、箴言、雅歌、ヨエル書に出て来る。特に雅歌は男女の愛を歌った詩歌であるが、その中でりんごは恋人やその息の甘い香りを喩えるもの(雅歌2:3, 7:9-10)、あるいは恋煩いを癒してくれるも

の(雅歌2:5)として現れ、レバノン杉、ゆり、ぶどうと並んで、見た目の美しさや、香りの良さという特質から恋人のメタファーとして好まれたようである。また、次の歌に描かれている恋人達の性愛の証人となったりんごの木は、アダムとイブの目を開かせて、お互いを性愛の対象として見るに至らせたという果実を与えたあの創世記の知識の木を彷彿とさせるものである。

りんごの木の下で

わたしはあなたを呼びさませましょう。

あなたの母もここであなたをみごもりました。

あなたを産んだ方も

ここであなたをみごもりました。

(雅歌8:5)

他方、ヨエル書第1章はいなごによる荒廃を歌っているが、ぶどうやいちじくやオリーブの木同様にりんごの木も衰え、実をつけることがなくなったと嘆いている。

ぶどうの木は枯れ尽くし、いちじくの木は衰え、

ざくろも、なつめやしも、りんごも

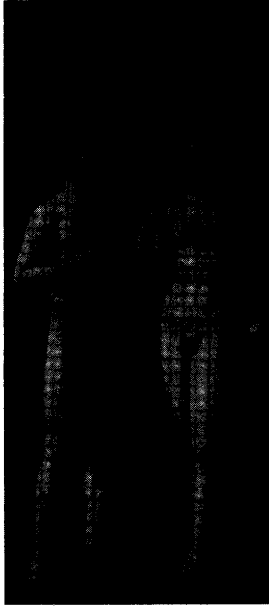
野の木はすべて実をつけることなく

人々の楽しみは枯れ尽くした。

(ヨエル書1:12)

「りんご」と訳された果実は人々の生活と密着して楽しみを与える果実として認められていたと言えよう。さらに、箴言では「時宜にかなって語られる言葉は銀細工に付けられた金のりんご。聞き分ける耳に与えられる賢い戀らしめは金の輪、純金の飾り」(25:11-12)というように、金のりんごは金の輪や純金の飾りと並んで、美しく貴重なもののメタファーとなっている。イスラエルの人々にとって、りんごは生活に密着しながらも、その形や香り、風味において、かけがえのないものを表わすメタファーとなりうる果実であったと言えよう。また、雅歌との関連で見ると、性愛の始まりを記すとも言える創世記第3章の知識の木がりんごの木であったと仮定するとき、いちじくやブシュカンでは得られないイメージの豊かさがこの愛の詩に添えられることは間違いない。

時代は下るが、美術史においても知識の木に関してはさまざまな解釈があることがわかる。アダムとイブを題材とした美術作品はルネサンス期に数多く登場する。画家達が知識の木をどのように解釈していたか、ルネサンスの



図版1 マゾリーノ

絵画を何点か比較検討したい。

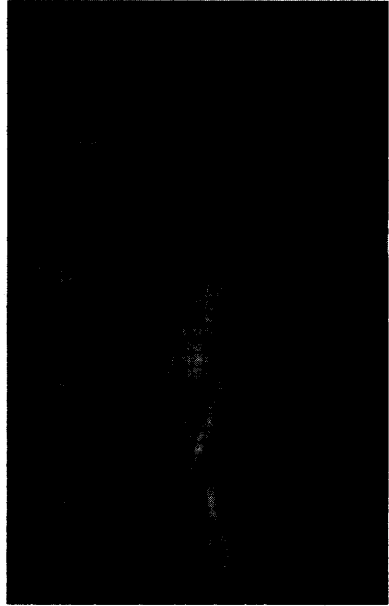
まず初めに、イタリア・ルネサンスのマゾリーノの「地上の楽園とアダムとエヴァ」(1424/25-27)では木にからみつく女の顔をした蛇がおり、解説ではエヴァが「禁断の木の実(ここでは林檎であろう)をとって食べようとしている」と、禁断の木の実が林檎であると断っている⁽¹³⁾。しかし、木になっている果実は確かに赤みを帯びた丸い実であるが、葉がりんごではないようである。(図版1) 盛期イタリア・ルネサンスのミケランジェロの「原罪と楽園追放」(1510)でも、誘惑者は上半身が女の姿をした蛇であるが、木の葉は印象深く描かれているものの、実は木の間や誘惑者とイブの手の中に隠れて見えなくなっている。(図版2) 葉からしていちじくであろうかと思われる。なお、システイーナ礼拝堂の天井画では、中心部に描かれた「光と闇の創造」から「ノアの泥酔」までの9枚の絵の四隅に、着席した人々が配置されている。この人々の脇や後ろ側に袋や布に包んだ形でどんぐりのようなブナ科の実らしきものと、先の「原罪と楽園追放」の絵の知識の木の葉



図版2 ミケランジェロ



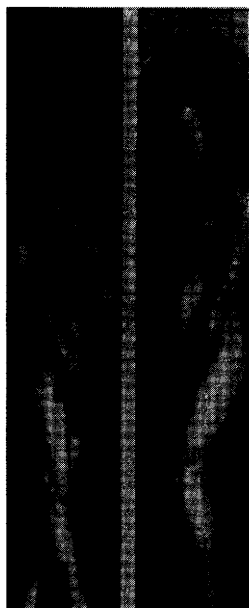
図版3 ラファエロ



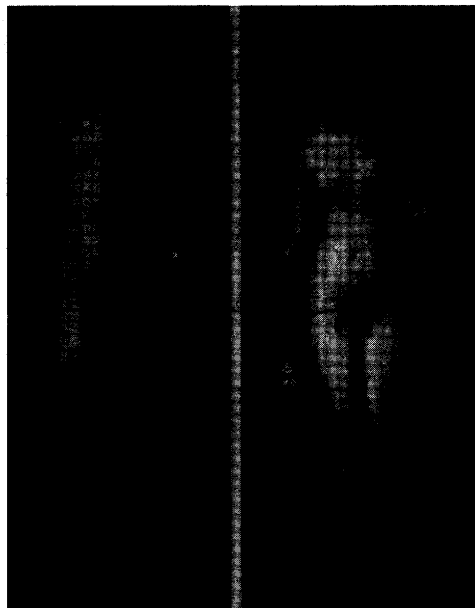
図版4 ヒューホ

と似た葉が見え隠れしている⁽⁴⁾。この葉の緑色と袋や布に包まれた上から感じられる質感がモチーフとして「青銅の蛇」へと続いていくように思われる。またミケランジェロの直前にラファエロが「アダムとエヴァ」(1508-09)を制作している。ここでも上半身が女の蛇が登場し、ミケランジェロと同じ木の葉が描かれており、イブはどんぐり型の木の実を親指と人差し指の間にはさんでアダムに見せている。(図版3) これらイタリア・ルネサンスの画家達の作品からは、蛇の描写に強烈な類似性が見られる反面、知識の木の実に関しては一定の解釈があったとは思われない。ラファエロ、ミケランジェロに至ってはりんご説を採っていないことがはっきりとわかる。

他方ネーデルラント、ドイツの北方ルネサンスの画家はどうであろうか。ヒューホの「原罪とキリストの死への哀悼」(1470年頃)では、誘惑者は女の顔をしたトカゲのような爬虫類であり、片手にりんごを持ったイブが、もう一方の手で新たにりんごを摘もうとしている。(図版4) ヒューホより30年ほどさかのぼった1430年代にファン・エイクによって作製されたゲント祭壇画の「アダムとエヴァ」ではイブが干し柿に似たぶつぶつの木の実を手



図版5 ファン・エイク

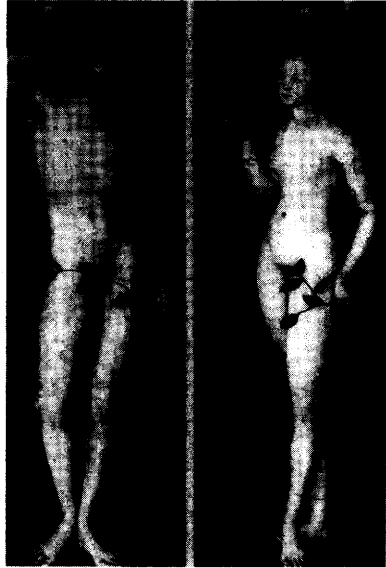


図版6 デューラー

している。(図版5) また、ボスの三連祭壇画の「干草の車」(1485-1505)では、イブが片手に果実を持ち、木の上の女の顔をした蛇がりんごと思われる果実をアダムに差し出している。さらにデューラーは銅版と油彩と木版で「アダムとエヴァ」を残しているが、1507年の油彩画では、アダムもイブも赤いりんごの実を手をしている。(図版6) 1504年の銅板画では葉が1507年のりんごの木の葉とは少し違うが、その丸い果実はりんごに見える。(図版7) 1510年頃の作とされる木版画でも明らかに果実はりんごであるとわかる。時代が下がってクラナハの「アダムとエヴァ」(1528)でも果実はやはりりんごである。(図版8) このように北方ルネサンスの作家達にとって禁断の木の実をりんごとする解釈が一般に受け入れられていたと思われる。このことはイタリアと違って、ドイツやネーデルラントなど天候の温暖でない地域においては、りんごが最も身近な果実であったことがひとつの根拠となっているに違いない。このように考えると、ハインツ＝モーアの「楽園の知恵の木は、作者の出身地の風土にしたがってりんご、いちじく、さくら、ぶどう(たとえばブルゴーニュ)あるいは空想の実のなる木であることが認めら



図版7 デューラー



図版8 クラーナハ

れる⁽¹⁵⁾という説は十分に説得力を持つ。しかしながら、ドイツ人にとって、りんごは身近な果実であり、家の庭先に生えている木という以上に、りんごには人々の格別な思い入れがあったように思われる。

ドイツの宗教改革者マルティン・ルター(1483-1546)の言葉として有名な格言がある。「たとえ明日この世界が減びることを知っていても、私は、今日、なお私のリンゴの若木を植えるだろう⁽¹⁶⁾」。これがルターの言葉でないにしてもこの言葉の裏には、もちろん知識の木をりんごとする解釈があり、これまで見てきた画家達を含むルター以前やルターと同時代の多くの人々の、りんごに象徴される楽園への深い憧憬と、永遠に楽園を追放された悲しみが込められていると言えるだろう。しかし全体のトーンからは生命への希望が伝わってくる言葉である。同様にヒューホの痛々しい裸体に比べて、デューラーの油彩画の瑞々しい人物像からは、二人の生命力が伝わってくる。

同じくドイツのグリム兄弟が収集した昔話の中には、数え切れない程のりんごが登場する。「何もこわがらない王子」「ねずの木の話」「白雪姫」「金の鳥」「一つ目、二つ目、三つ目」などのようにりんごが話の筋に大きく関わ

るものもあれば、「白い蛇」「ホレおばさん」「鉄のハンス」のように筋とは特別な関連は無くても、りんごに何らかの意味が込められているように思われるものや、「手なし娘」や「三羽のカラス」などのように、風景に添えられた一本の木として、あるいは旅の食料として登場するものもある。確かに昔話は主に特別に学問をしたわけではない女性達によって、口伝えに受け継がれてきたものであることを考えるとき、話し手にとっても聞き手にとってもイメージしやすい馴染み深いりんごの木は、昔話の格好の題材となり、その地域の風土を描く上で適切な道具となるであろう。「りんご」という一つの単語によって、共通のイメージが聞き手の頭の中でふくらむのである。しかし、それだけではなく、黄金のりんごや命のりんごという特別な意味合いが添えられる時、昔話を聞きながらも人々は意識下で永遠に失ってしまった楽園を希求していたのではないだろうか。エドモンド・リーチは知識の木を生命の木と対比させて死の木であると定義する⁽¹⁷⁾。確かに、この木の実を食べたことにより人は永遠の命を失い、生命の木への道を断たれてしまったのであるが、知識の木をりんごで表わすとき、知識の木は死の木というよりは、樹木が本来持つ生命力というアトリビュートも加わって、むしろ生命の木とだぶらせたいというほとんど無意識的な心の動きがあったと言えよう。

ギリシア神話における黄金のりんご

ヘブライズムと並んで、西洋思想に多大な影響を与えたギリシアの世界観では、りんごはどのように扱われているのであろうか。ここではトロイア戦争の原因となった不和のりんご、ヘスペリデスの園のりんご、アタランタとヒッポメネスとのりんごを考察する。

英雄アキレウスの親となるペレウスとニンフのテティスの結婚式に不和の女神エリスが招かれなかったため、怒った女神が黄金のりんごに「最も麗しき者へ」と書いて投げ込んだのが、「不和のりんご」と言われるものである。このりんごをめぐる三柱の女神、ヘーラ、アテーナ、アプロディテーが争い、この審判をゼウスに求めたが、ゼウスは狡猾にも山で羊の番をしていたトロイアの王子パリスに審判を任せた。三柱の女神はそれぞれ賄賂を約束し、自分を選ぶようにとパリスを唆したが、スパルタの王妃ヘレネーを与えると約束したアプロディテーにりんごを渡したという話である。女神の約束通り、パリスはスパルタのメネラオスを訪ねた折、ヘレネーをさらってトロイアへ逃げ戻ったのである。これが「パリスの審判」であり、ヘレネーを取り戻すためにギリシア軍がトロイアを攻め、多くの悲劇が生まれた⁽¹⁸⁾。

この不和のりんごを、エリスはヘスペリデスの園から取ってきたという説

がある⁽¹⁹⁾。このりんごの木は母なる大地の女神からヘーラへの結婚祝いの贈り物で⁽²⁰⁾、はるか西方の園に生えており、夜の娘であるヘスペリデスと竜のラドンがその木を守っている。ヘラクレスは12の難業のうちの11番目の仕事として、このりんごを取ってくることを命じられる。この園は巨人アトラス（アトラス山脈の擬人化）が天空の軸を支えている場所の隣にあったと言われる。しかし死ぬべき人間が行き着く道を見いだすこともできなければ、神々の女王の所有物に手出しをすることはまったく許されることではなかった⁽²¹⁾。ヘラクレスが太陽神の象徴とも言える黄金のりんごを手に入れることができたのは、まさに彼自身が神の子であったからであろう。ヘスペリデスの園のりんごの木は生命の木であり、りんごは不老不死のシンボルである⁽²²⁾。実は北欧神話においても、黄金のりんごは若さを与える力を持つ。しかも、神々でさえ勝手にもいではその効用に与かることはできず、女神イドゥンの介入を必要とする。これは創世記の知識の木と対比するとき、大変興味深いアトリビュートである。また、これらのりんごが黄金のりんごであるという点にも意味があるように思われる。少し話はそれるが、イタリア語で pomodoro 「黄金のりんご（果実）」と言えばトマトを指し、マヤ文明ではトマトが太陽の象徴として太陽神に捧げられていたと言われている。グリムの昔話にも数多くの黄金のりんごが登場したが、これには太陽のような偉大な力が込められていると理解して良いのであろう。北欧神話でも、その地理的特質や、「神々のたそがれ」というテーマ上、若さを与える黄金のりんごが太陽を表すという解釈が成り立つ。従って、黄金のりんごは並々ならぬ力を所有したり、英雄でなければ手に入れることができないものであるという性格付けは、この果実の神々しさを増すために有益であろう。他方、エドモンド・リーチは善悪を知る知識の木は「死の木」とであると言う。ユダヤの神話においては神が人間に食べることを禁じた木は生命の木ではなく、死の木であった。また双方の神話では、この木と共に蛇ないしは竜が描かれている。竜と蛇は人間に敵対するという性質は共通であるが、その機能は全く逆である。エデンの園の蛇は人間に禁断の木の実を食べさせようと誘惑し、ヘスペリデスの園の竜はその実を人間に与えまいとして戦う。二つの神話は「禁断の木の実」という点で一見非常に類似しているように思われるが、りんごに与えられた性質が本来はまったく異なることが明らかになったことと思う。

さらに、ギリシア神話では「アタランタとヒッポメネス⁽²³⁾」の話の黄金のりんごが有名である。このりんごのおかげでヒッポメネスはアタランタを勝ち得るわけであるが、このりんごはアプロディテーがキュプロス島から取ってきてヒッポメネスに与えたものである。キュプロス島が本来アプロディ

テーに帰属する島であるが、同じくアプロディテーを祀るレスボス島の詩人サッフォーのアプロディテーに捧げられた詩にもりんごが登場する。

いざ、こなたへ、クレーターを立ち出でたまひ、
 この聖なる神殿へとわたらせたまえ、こなたには
 おんみがためのうるわしき林檎樹の社ありて、
 祭壇は乳香にくゆり立つ (「8 アフロディーテー女神に」⁽²⁴⁾)

杵掛は「林檎は古代においては「愛」「性愛」を象徴するものであった⁽²⁵⁾」と解説しているが、アタランタの愛を勝ち得るためにヒッポメネスがりんごを使うのも、そのりんごを与えたのがアプロディテーであるという点も辻褃が合う。こうして考えると、「最も麗しき者へ」と書かれたあのりんごを手にするのは、やはり愛の女神であるアプロディテーがふさわしいように思われる。

おわりに

エデンの園の知識の木の実は何だったのか。これまでの検証により、始めから「りんご」という通説があった訳ではなく、重層的な解釈とイメージの積み重ねがあり、最初のテキストから離れて「りんご」に落ちついた経緯が明らかになった。それは、ミルトンがその著書において、楽園の喪失を再現する際に「りんご」と明記したということで定説化したと言うよりは複雑である。それはまた、歴史的地理的なゆるぎのない根拠を得たというよりも、その美しさや付与されたアトリビュートに依るものであり、さらにはミルトンと同時期に万有引力の法則が明らかにされたという歴史的な偶然により、りんご以外にはもはや考えられないのではないだろうか。おそらく、これにはもう一つの楽園であるヘスペリデスの園に生えている木が不老不死のりんごの木であるという神話が、イメージの重層化に一役買っていると言えよう。

さらにりんごは表象として聖書やギリシアという枠組みを超えて、ヨーロッパやアメリカの文学にさまざまな形で現れる。エデンの園の知識の木とヘスペリデスの園のりんごの木は、本来「死」と「生」という相反する特性を持ちながら、たとえばグリム童話では、「白雪姫」や「ねずみの木の話」のようにりんごが死を表す物語と、「何もこわがらない王子」のようにりんごが偉大な力を表すものがある。ユダヤの神話とギリシアや北欧の神話が、後世において融合され、新しく再現されていく様を見る思いである。もっと意識的には、J. ゴールズワージーの『りんごの木』があり、これはヘスペリデ

スの園を思わせるりんご園での禁断の愛の物語である。りんごは今後もテキストに新しいイメージを加え、そして新しいテキストを創造する上で貴重な表象となり続けるであろう。

註

- (1) 本稿執筆にあたって、敬和学園大学初代学長北垣宗治先生をはじめ、新潟大学名誉教授真壁伍郎先生、敬和学園大学の同僚の諸先生に貴重な情報や示唆に富むコメントをいただいた。ここに先生方と、一緒にりんごを研究した2002年度英米文学演習1を受講した学生さん達に感謝の意を表したい。
- (2) 西新発田高校創立100周年記念事業実行委員会『県立西新発田高校創立100周年記念誌』（県立西新発田高校、2002）。
- (3) 北嶋廣敏『林檎の神話学』『林檎の現象学』『林檎の社会学』（アディン書房、1981、82、83）。
- (4) ライナー・マリア・リルケ、富士川英郎訳『リルケ詩集』（新潮文庫、1969）51-52。
- (5) 例えば、北嶋『林檎の社会学』38、大槻虎男『聖書植物図鑑』（教文館、1992）65。
- (6) ジョン・ミルトン、新井明訳『楽園の喪失』（大修館書店、1979）244。
- (7) 渡辺正雄「ニュートンのりんご」『国際基督教大学寄付プログラム「科学史」解説記念講演』（1988）18-19、22-23参照。ただし注意しなければならないのは、りんごのエピソードは、ニュートンが万有引力の法則の基本的な着想を得てから60年も後の回想としてステュークリが記録している。従ってりんごのエピソードはミルトンの『楽園の喪失』より後になって知られるに至ったと考えられよう。
- (8) グリム、ナンシー・エコーム・パーカート画、八木田宣子訳『白雪姫と七人の小人たち』（富山房、1975）。
- (9) 大槻、65。
- (10) ハインツ＝モーア『西洋シンボル事典』（八坂書房、1994）24。
- (11) 大槻、65。
- (12) 大槻、66。
- (13) 佐々木英也、森田義之編集『世界美術大全集第11巻イタリア・ルネサンス1』（小学館、1994）390（解説は生田園によるものである）。
- (14) ただし実際のブナ科の木の葉はこの様な形状ではない。
- (15) ハインツ＝モーア、9。
- (16) 宮田光雄『聖書の信仰1』（岩波書店、1996）197。本書で宮田は「リンゴの若木」の話が「ルターの言葉」とされてきた経緯をたどり、「この格言がルターに由来するというのは、一つの《伝説》だったのです。それは、宗教改革者の言葉とされることによって、権威づけを与えようと試みたものでしょう。（中略）もっとも確からしく思えるのは、ルターが実際に考えていたこと、あるいは考えていたと思われることなどの断片が、まさに《ルターの言葉》として、この格言の中にもちこまれ、綴りあわされるにいったんではないでしょうか」（225）と結論する。
- (17) エドモンド・リーチ『神話としての創世記』（ちくま学芸文庫、2002）19。
- (18) ヘレネー奪還のための戦いの10年目のアキレウスとアガメムノンの間の抗争はホメロスの『イーリアス』に、戦争後の帰還については『オデュッセイアー』に記載されている。トロイア戦争は多くの詩人の想像力を刺激し、ギリシアの三大悲劇

詩人らも彼らよりも7世紀も前に起きた戦争とその戦争の悲惨を悲劇に取り上げている。また、ドイツの考古学者シュリーマンが19世紀になって、トロイアの遺跡を発掘し、それまで神話的な存在と見なされていたトロイアとトロイア戦争の実在を証明した。

- (19) カール・ケレーニイ『ギリシアの神話－英雄の時代』（中公文庫、1990）394。
- (20) ケレーニイ、212。
- (21) ケレーニイ、213。
- (22) Mark Morford, Robert Lenardon, *Classical Mythology* (Longman, 1977) 364。
- (23) オウィディウス、中村善也訳『変身物語』（下）（岩波文庫、1989）95-106。
- (24) 杵掛良彦『サッフォーー詩と生涯』（平凡社、1988）14-15。
- (25) 杵掛、164。

図版出典一覧

- 図版1 マソリーノ「地上の楽園とアダムとエヴァ」佐々木英也、森田義之編集『世界美術大全集第11巻イタリア・ルネサンス1』（小学館、1994）119。
- 図版2 ミケランジェロ「原罪と楽園追放」久保尋二、田中英道編集『世界美術大全集第12巻イタリア・ルネサンス2』（小学館、2000）116-117。
- 図版3 ラファエロ「アダムとエヴァ」『世界美術大全集第12巻イタリア・ルネサンス2』203。
- 図版4 ヒューホ・ファン・デル・フース「原罪とキリストの死への哀悼（二連画）」勝國興編集『世界美術大全集第14巻北方ルネサンス』（小学館、2000）87。
- 図版5 ファン・エイク「アダムとエヴァ」『世界美術大全集第14巻北方ルネサンス』54。
- 図版6 デューラー「アダムとエヴァ」『世界美術大全集第14巻北方ルネサンス』175。
- 図版7 デューラー「アダムとエヴァ」『世界美術大全集第14巻北方ルネサンス』212。
- 図版8 クラーナハ「アダムとエヴァ」『世界美術大全集第14巻北方ルネサンス』270。